

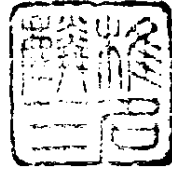
椎名麟三全集



評論
3

冬樹社

椎名麟三全集16



昭和四十九年七月三十日初版第一刷発行

著者——椎名麟三

発行者——高橋直良

発行所——冬樹社 東京都千代田区神田神保町二——一八

電話東京二六四——〇三四六 振替東京七七五七

印刷所——三容堂印刷株式会社

製本所——一重製本株式会社

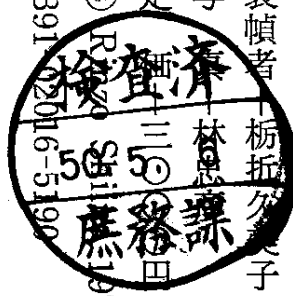
装幀者——栃折久美子

写定者——林忠謙

定本——三〇〇〇部

© Rinsen Shoten 1974

0391-02016-5190



第十六卷目次

I

生き抜く人間の問題	5
ドストエフスキーと私	8
主人公の創造	14
コップの中の蠅	24
質疑応答	29
「死に至る病」の立場	35
深い体験の必要	41
現代とニヒリズム	46
日本映画への希望	55
「居酒屋」を見て	57

「ヘッドライト」	62
田中千禾夫「肥前風土記」	64
シナリオと映画精神	66
新劇雑感	82
「枯葉」	87
二つの映画	89
「道」	90
「抵抗」	93
黒沢明「どん底」	97
映画における人間	99
Ⅱ	
信じられないということ	141
イエスの誕生	158
私は何故クリスチャンでないか	166

非正統派の弁	173
私の反省	176
聖書における不条理について	179
Ⅲ	
姫路城	201
三つの願い	203
菓のパンフレット	204
生きる	206
日曜時評	210
旅の果に	214
思い出をたずねて	217
武田泰淳さんについて	231
私が作家になったとき	237
読者の方へ	241

「美しい女」と私	242
作者の言葉	244
平凡な人間	246
作者の言葉	250
タンタロスの踊り	252
私のしたいこと	254
裏長屋のおかみさん	257
生さんがために	262
俳優について	268
猿の芸	272
幽霊論議	274
試験管への郷愁	280
映画館の子どもたち	282
蟻と幽霊	291

私の病状	296
現代の恋愛論	297
猫背の散歩	
愛について	359
自由について	381
死について	414
生きる意味	
一つの経歴	433
狂気の壁	438
全く無関心となること	444
あきらめについて	451
死なないもののように	456
新しい俳優	463
人間はホントウにだれかを愛することができるか	469

悪魔の製造		494
解説		503
岡庭昇		
解題		513

生き抜く人間の問題

いまは消え去っているが、敗戦間もないころに出ていた有力な文芸雑誌の一つに『個性』という雑誌があった。その雑誌で数ヵ月にわたってドストエフスキー研究の座談会を連載したことがある。いまではジャーナリズムが外国の一個人の作家研究を、このような形でとりあげるといふことはなくなってしまったが、しかし私は、その連載を当時の日本の精神状況を象徴する一つの事件だったと思っているのである。

言いかえるならば、あの危機と混乱のなかで、ひとびとが自分の生き方を決定しようとするとき、どうしてもドストエフスキーの投げかけた諸問題に出会わざるを得なかったのだ。だからそれは、文学の世界だけの問題ではなく、めいめいの生きて行くためには対決しなければならない問題として立ちあらわれていたのである。いわば文学的影響という言葉で片づけられるようなものではなかったのだ。それがそれまでの日本文学とドストエフスキーとの出会いのちがいであると思っている。

このことは日本だけの特殊の現象ではなかった。そのころ占領下にあるという条件からくわしいニュースに接することはできなかったが、フランスではサルトルやカミュなどの実存主義の一派が、イギリスではグ

レアム・グリーンなどが、私たちと同じドストエフスキー的な問題のなかから立ちあらわれていたのである。東西期せずして同じ問題に出会っていたということは、戦後の世界の、全部ではないにしても、あるひとびとの精神状況をあらわしていたのだと、いいと思う。

私たちはそのための集会をもったり、あるいは顔を合わせたような機会に、いろんな自分自身の問題について討議した。それらの私たちは、当時戦後派という名前で一括されていたが、その私たちの間では、ドストエフスキー的な問題とただで、それが何を意味するか説明しなくてもおたがいに通ずるものがあったのである。鉄とただでそれが何であるか通ずるようにだ。そのように通じ合うことができたのは、もちろんその仲間には埴谷雄高のようなドストエフスキー研究の権威者もいたが、しかしやはりドストエフスキーの問題が、私たちの生活の問題となっていたからだといった方が正しいようだ。

では、ドストエフスキーの問題という言葉で何を意味したかという、一口にいつてしまえば、人間の危機に立ちあらわれて来るような問題だ。具体的に言えば、たとえば野間宏の作品に「顔の中の赤い月」という短篇がある。そのなかに北山年夫という兵隊が、戦場で、戦友をたすけようとすれば自分も死んでしまわなければならないという状況におかれたとき、北山は、自分の命をすくうためにその戦友を見殺しにするという場面がある。もちろんその北山はそうしたために自分の人間性に対してすくうことのできない傷痕を受けるのであるが、恐らく、このような状況におかれたひとびとは、当時戦争に行ったひとびとだけではなく、戦争に行かなかったひとびともあの空襲下において、また戦後のあの食糧難において、そのような北山と同じような状況に投げ込まれていたのである。恐らくほとんどの国民は、このような経験をもっているのではないかと思われるほどだ。

いわばドストエフスキーの問題とは、このような問題なのだ。つまり人間性がそこで破滅し、人間の存在

そのものが消え去る地点においてはじめて問題になって来るところの問題なのである。しかも戦後派というひとびとは、この問題の解決を、その栄養失調の身体に背負わざるを得なかったのだ。そのような問題を誤魔化しては生きて行けなかったからだ。

前記の埴谷雄高は、「死霊」という作品でそれを大規模に試みようとし、野間宏は共産主義にその問題の解決を見いだし、『近代文学』の評論家のひとびとは、その問題を主体性の問題として提起したのである。またちがった面からこのドストエフスキー的問題を自分の問題として出発した武田泰淳や安部公房などのひとびとのあることを忘れてはならない。

ドストエフスキーと私

1

フランスの作家ルイ・フィリップは、ドストエフスキーの「苦悩を愛す」という言葉をかかげて、この言葉は嘘っぱちだが、しかし何となくさめの感じられる言葉だ、という意味のことをいっている。

たしかに苦悩なんてこの人生にもっとも必要なものであって、できるならなくてすまいたいところのものだ。私なんか、いつも苦悩にとりまかれて、あの蠅取紙に投げ込まれてジタバタしている蠅のような情ない目に会っている。だが、世のなかはさまざまであって、人間の精神をきたえるために必要だという理由で、苦悩の功績を説くひともいるが、そんなひとに会うと、私は一度そのひとに死ぬような苦しみを見せてやりたいのである。とにかく私は苦悩なんかごめんだ。だから苦悩があたえられたら、たとえ蠅取紙の蠅のようであろうと、それから逃れようと懸命になることは必定である。

だから、苦悩を愛すという言葉を嘘っぱちだというひとは、ほんとうに苦しんだことのある人間だけなの